



大垣市金生山化石館

化石館だより

コラム

「チバニアン」に思う

先般、茨木大学や国立極地研究所などの研究グループが「チバニアン」（「千葉時代」）という名称で、千葉県市原市にある地層を「国際標準地」として登録するように国際学会に申請したというニュースが流れました。千葉県市原市の地層には、およそ77万年前に地球磁場の逆転が生じたことを示す明確な証拠が記録されており、連続して堆積しているこの地の地層からは当時の環境を推定できる化石資料なども多く得られるというのです。

申請が受理されると、現在「更新世の中期」とされている地質時代に「チバニアン」という名称がつけられることとなります。現在の地質年代表には日本の地名のついた時代は存在しませんし、他に日本の地名が付きそうな時代もないことから、大いに期待が高まっているということです。ただし、イタリアにも有力な候補地があるということですから予断は許されません。

地球は約46億年前に誕生したといわれていますが、その長い歴史は、岩石の中に記録された様々な情報を元に細かく時代区分がなされ、「地質年代表」としてまとめられています。6億年以前の古い時代の化石資料はわずかしか見つかっていませんが、化石資料が爆発的に増えてくる5億4千万年前以降は、化石によって「古生代」「中生代」「新生代」と大きく時代区分がなされ、更に古生代の中は「カンブリア紀」「オルドビス紀」「シルル紀」「デボン紀」「石炭紀」「ペルム紀」という5つの時代に区分されています。また古生代末期の「ペルム紀」についても、古い方から順に「シスラリアン世」、「ガダルピアン世」、「ロピンジャン世」に区分され、それぞれの「世」も前期・中期・後期などに細分されています。

このような時代区分は、研究の進展に伴って新たな発見や異なる見解が生じてくることから、国際的なルールが設けられており、国際的な学会や委員会が設置されて定期的に検討がなされています。現在では、特定の地質時代を示す名称には、その時代の典型的な地層が分布する場所の地名を付けることとなっていますが、古くは地名だけでなく、地層の特徴や部族名などを用いることもありました。石炭紀は、石炭を産出する地層が堆積した時代を意味します。カンブリア・デボ

代	紀
新生代	第四紀
	第三紀
中生代	白亜紀
	ジュラ紀
	三畳紀
古生代	ペルム紀
	石炭紀
	デボン紀
	シルル紀
	オルドビス紀
	カンブリア紀
原生代	
始生代	
冥王代	

ンなどはその時代の地層が分布するイギリスの地名が元となっており、オールドビス・シルルはその地方に住むイギリスの部族名が元となっています。ペルム紀は以前「二畳紀」とよばれていましたが、これはこの時代の地層が二つに大別されるという特徴から名づけられました。現在では、ロシアのペルム地方に典型的な地層があることからペルム紀とされています。

地層の堆積時代は、示準化石という特定の化石の産出によって決定されます。示準化石には様々な動物の化石が用いられますが、石炭紀からペルム紀については、フズリナが重要な示準化石の一つになっていました。放散虫やコノドントなど、より広範囲に分布し、精度の高い示準化石が用いられるようになると、フズリナ化石の重要性にも陰りが出てきましたが、今でも重要な示準化石の一つであることには変わりありません。赤坂石灰岩からは、フズリナ化石がとて多く産出し、特にペルム紀中期のネオシュワゲリナ科のフズリナ類については系列進化が詳しく研究されており、世界的な模式地（国際標準地）の一つとされていました。かつては、地質年代表の中でペルム紀中期を「赤坂世（赤坂統）」と記述する時代があったのです。今は中国に典型的な地層が発見され、赤坂の名前が消えてしまいましたが、国際的な模式地のひとつであったということは記憶に残しておきたいものです。

（文責：高木洋一）

お知らせ

前期企画展

「巨大二枚貝シカマイア」

～ 金生山の二枚貝化石たち ～

開催中!

金生山で発見された殻長1mを超える巨大な二枚貝シカマイアは古生代最大の二枚貝とされています。その模式種であるシカマイア・アカサカエンシスの復元模型と多くの実物標本、また金生山から発見された全種類の二枚貝化石を展示しています。

期間： 5月3日（水）～9月11日（月）

入館料： 一般100円 高校生以下無料

開館： 火曜日・祝日の翌日



問い合わせ： 大垣市金生山化石館

電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)

Email kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp